

初春の計

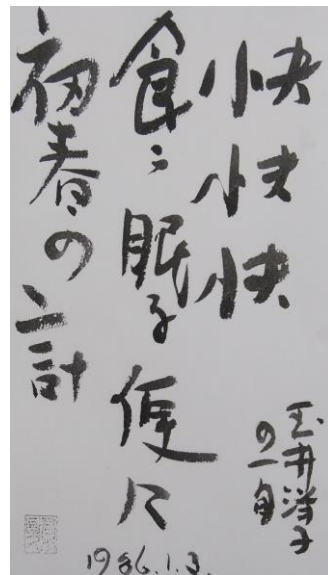
玉井洋子

上司の君本昌久氏のお宅に年始のご挨拶に伺った。先客が一人いた。お屠蘇を祝いご機嫌になったところで、君本さんが書初めをしようと言い出された。予期しなかった展開にもぞもぞ。いきなり新年の抱負をといわれても困る。こういう遊びは一番苦手。いたたまれなくなつて何度も座り直す私を氏の愛犬スピッツのリリーが不思議そうに見あげている。

このページに掲げている作品はこの時の君本氏直筆の書である。作品に一九八六年、一月三日と日付があるので十六年前のことになる。押し入れに眠っていた作品が出てきて、なつかしく眺めているうちに面白半分で兵庫県現代詩協会のアートコレクション展に出してみようと思いついたのだったが、展覧会ではたいして話題にもならず、名札とタイトルを見くらべて仔細に鑑賞してくれる人はいなかった。軽くスルーされてしまったようだった。

しかし、会期も終わりに近づいたある

日、やってきた会員のOさんが「これ玉井さんの句？」と。ええ、あの、と事の次第を話しかけたが、詳細を説明する間もなく曖昧な笑いでその場を取り繕ってしまった。今、ここに改めてお披露目をしてカミングアウトめたことをしてどうなるものではないのだが、やはり気がかりが残る。



先生のお宅にはじめて伺って浮かれていただけに、さて、あんたは新年になにを思うかと聞かれて答えられる何もなかった。とっさに開き直って私はこう書いた（はずである）。

快眠 快食 快便 初春の計

ところが君本さんの手を経て戻ってきたそれは詩的な一幅の書になっていた。全く、ぐうの音もでない。だから詩人は怖いのだ。だが、古書籍商でもあるOさんは、「貴重なもんや。大事にしい

や」と言って去っていかれた。

2022, 1月神戸市灘区の神戸文学館で開催されたアートコレクション展に出品した君本昌久氏の作品の評価額は私のなかで一気にはねあがった。

古今東西の美術史に残る名品たちもコレクターたちの血道を挙げて磨きあげられた審美眼によって代々生かされてきたのだろう。

しかしながら、完膚なきまでに添削されたこの句は一体誰のものだろう。正直いってこの頃私も初心だったから詩に憧れていながら、詩がこわくて手も足も出なかった。昼間働く人たちが仕事を終えて小説や詩を学びにくる文学学校の事務局にいて何一つ書かないでいる私に、君本さんは「玉井ちゃんなあ、ここで雑巾がけがなんぼうまなつてもしやあないねんで」と、さりげない挑発。しかも暗喩である。さすが目利きのOさんは玉井洋子のボキャラリーとの違和を感じとられていたのだろう。

眠れない夜夜。食うか、食われるか。文学の場もまた修羅である。